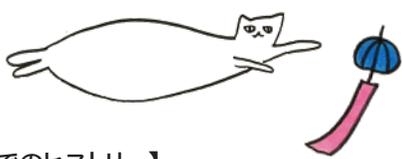


これが  
“さくさく”  
なごうめ!



【前回までのヒストリー】

SIAF2017 が閉幕した翌年、これまで SIAF ラウンジの活動の軸となっていた SIAF ラボが、札幌国際芸術祭実行委員会直轄のプロジェクトとなったことにより、SIAF ラウンジは新しい体制を迎えることとなった。次の SIAF2020 に向け、2015 年の開室から 3 年あまりを振り返り、ラウンジ独自のライブラリー機能やカフェ機能を見直し、その充実をはかった。

# サイアフ・ラウンジ ヒストリー vol.07

活発期 2019 → 2020  
3 回目の芸術祭へ向けて

3 回目の開催となる SIAF2020 では、1 人のゲストディレクターから、3 人のディレクターチーム制へと、体制が変更された。天野太郎ディレクター、アグニエシカ・クビツカエディレクター、エツカディレクターに引き続き、2019 年 4 月、「コミュニケーションデザインディレクター」に田村かのこ氏が就任すると、開催に向けてより本格的な機運が高まった。

そしてその頃、SAF ラウンジは前年に引き続き、独自のライブラリー機能とカフェ機能を充実させ、そのことを通じて SAF と市民の橋渡しとなるような取り組みをさらに強化していった。

カフェでは、オリジナルブレンドコーヒーの製作に取り組んだ。宮田屋珈琲さんにご協力いただき、夏でも爽やかに飲めるホットコーヒーをコンセプトとして、SAF ラウンジでしか飲むことができない新たなコーヒーが誕生した。豆の苦味や風味はしっかりとしつつも、後味がスッキリとしたオリジナルブレンドコーヒーは、販売直後から好評となった。また、同年 6 月に開催された SIAF ラボのプログラム「夏至祭」資料館」では、イベントにちなんだオリジナルドリンクを限定販売するなど、レシピ開発にも取り組んだ。(オリジナルドリンクについては、そのうち「Cafe のちょっといい話」などで取り上げられるかもしれません)

り、子ども連れの方にも多く手にとっていただいた。

同年 7 月には SIAF2020 のテーマや会場も発表となり、それに伴うトークプログラムやワークショップなどが開催された際には、室内でこれらと連動した企画展開を行った。

例えば、アグニエシカディレクターが所属する「WRO アートセンター」のメディアアートビエンナーレに、ART-SATX SIAF ラボの作品 (SIAF2017 に出演) が展示されることになった際には、現地ポーランドでの作品設置の写真を展示した。また、SIAF2020 のイベントとして SIAF2020 参加アーティスト、シエモさん (フシエミスワフ・ヤシャルスキ) とライナーさん (ライナー・プロハスカ) によるワークショップが札幌市役所ロビーで行われた際は、その連日の経過の様子を写真で掲示した。他にも SIAF ラボの学生メンバー (研究員) と \*SAF 部のメンバーによる合同企画展覧会「光みつめる姿みつめる展」では、作品制作で使用した部品がラウンジ内にも展示されて、展覧会の導入も兼ねて楽しむことができるような工夫に協働して取り組んだ。

他にも書き出すとキリがないが、2018 年から新体制となった 2 年目は、このようにラウンジの機能を活かし、発展させながら様々なことを実践した。それにより、札幌市資料館の貸室利用者、観光目的の方、カフェや休憩場所の常連客など、元々は SIAF のことを知らない来室者にも改めて SAF のことを知ってもらう、0 を 1 にしていくような手応えを確かに感じるようになった。

また、ラウンジ内だけでなく、SIAF2020 のイベントなどで、スタッフ手書きのチラシを配布したり、ショップカードを制作したり、より多くの方にラウンジへ足を運んでもらう周知活動も並行して行った。

しかし SIAF2020 の会期まで 1 年をきった 2019 年度の冬、新型コロナウイルス感染症による未曾有のパンデミックが起こった。



札幌では全国に先駆けて緊急事態宣言が発令され、SAF ラウンジのある札幌市資料館も、他の市内公共施設と同様に、異例の臨時休館となる。そして SAF ラウンジは、コロナ禍における活動を模索する新たな局面に立たされていくのである。

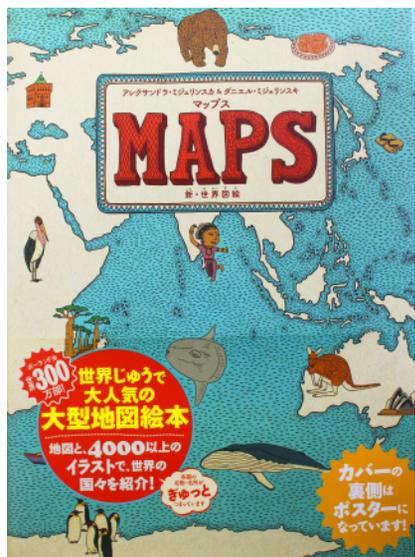
SIAF ラウンジスタッフ 杉本直貴

\* SAF 部... 2018 年公募により発足した、SAF をはじめとする札幌・北海道の芸術文化の担い手を発掘・育成するプログラム。ミーティングやレクチャー、実践を通じ、アートについて学んでいる。



田村かこの  
ディレクター  
おすすめ！

エラ・フランシス・サンダース 著、前田まゆみ訳『翻訳できない世界のことば』(創元社)



アグニエシユカ・ワビツカ  
≡ツェドシヅツカ  
ディレクターおすすめ！

Aleksandra Mizielinska, Daniel Mizielinski 著『Maps』(Big Picture Press)



天野太郎  
ディレクター  
おすすめ！

エーリヒ・ケストナー 作、池田香代子訳『ふたりのロッテ』(岩波書店)



第7回テーマ

「ディレクターのほんだな」

2020年の冬に開催予定だったSIAF2020では、天野太郎ディレクター、アグニエシユカ・クビツカ、ジェドシヅツカディレクター、田村かこのディレクター、3人のおすすめ書籍をそれぞれ紹介してもらう「ディレクターが選ぶ、おすすめBOOK」という企画を実施しました。今回はその中から、「ほんだなSIAF」と称して子ども向けに選出していた3冊の本を紹介いたします。子どもから大人まで楽しめる本ばかり。全てSIAFラウンジの本棚にございますので、気になった方は、ぜひ手に取ってみてくださいね。

まず天野さんがおすすめしたのは、天野さん自身も小学生の夏休みに読んだという『ふたりのロッテ』。別々の国で育った双子の女の子たちが、ある夏休みに偶然出会うところから始まる物語です。登場人物一人ひとりの人生に注目することで、色々な読み方ができるのが魅力的な一冊。児童文学でありながら大人でもワクワクするストーリーになっています。

アグニエシユカさんは『マップス 世界図絵』を選んでくれました。ポーランドで人気の絵本作家夫妻が、地図とかわいいイラストで世界を広く深く紹介する大型絵本です。世界中で大人気の絵本ですが、同じくポーランドで活躍されるアグニエシユカさんにとっては特別な意味のある一冊なのかもしれません。

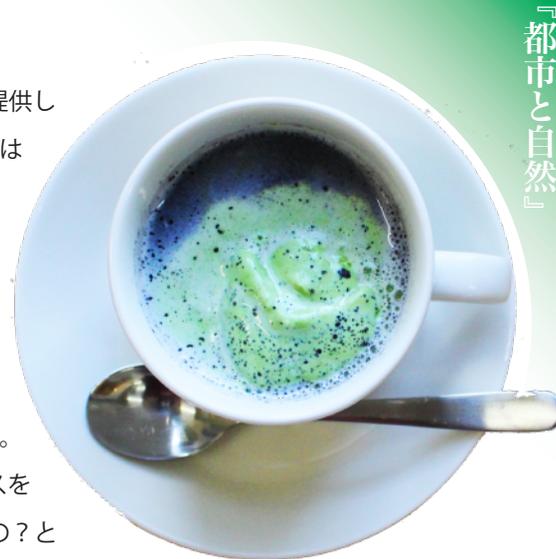
最後に、田村かこのさんが紹介してくれたのは『翻訳できない世界のことば』。世界各地の言語にある、その言葉でしか表現できない感情や情景たち。そういった言葉をイラストと文章で伝えていきます。「アートトランスレーター」として人とアート、言葉の間に立つて活躍する田村さんは、言葉で伝えることのもどかしさ、そして世界の言語の多様性と言葉の持つ力をよりいっそう感じているのかもしれないね。

さて、今回は、SIAF2020ディレクターチームのおすすめ書籍を紹介してきました。「本棚を見るとその人がわかる」という言葉はよく聞かれますが、確かにその人がどういった本を読んでいるかを聞くのは新しい一面が知れるようで面白いですね。皆さんもぜひ親しい人に、「どんな本を読むの?」と聞いてみてはいかがでしょう。

Caféの、ちょっといい話？

旬の素材を使ったり、季節のイメージに合ったドリンクを提供している「季節の限定メニュー」。提供期間が過ぎても「あれはまだある?」「また飲みたいと思って来たよ」と来室された方々からお声がけいただくことがあります(いつもありがとうございます!)

さて、春夏の限定メニューを見て「おや?」と思った方はいらっしゃったでしょうか。それはなぜかということ、メニュー名がSIAF2014の開催テーマ「都市と自然」だから。黒ごまクリームをたっぷり混ぜたホットミルクに抹茶アイスをそっとのせた一品。あったかいの?冷たいの?どっちなの?と困ってしまいそうですが、どこまでも続く優しい甘さが人気となりました。今後もSIAFの開催テーマをモチーフにした限定ドリンクが登場予定です。ぜひご注目ください。



SIAFの開催テーマを  
ドリンクで表現してみたら!

『都市と自然』

SIAF ラウンジとわたし。

今朝も毎日の習慣としてコーヒー豆をミルで挽き、自宅での1日を始める。お湯の淹れ方は、中心から外に向かって5回ほど回しながら豆をフィルターに押し付けるように。円錐型の窪みができるのと正しい。2015年にSIAFラウンジで勤務していた当時、味の統一のためにスタッフ皆で練習を重ねたので、いまだに手がそのように動く。まだオープンしたてで、メニュー開発も試行錯誤の連続だった。たまねぎのジャムや、行きつけのパン屋の「ひじきのカルツォーネ」を真似してホットサンドを作ってみたけど、このふたつは結局幻のメニューに。

パレットのような形のコップ棚を作ったのも懐かしい。これは今もキッチンに存在している。

その時々催しや情報、スタッフのアイデアを受けて変化していくラウンジ。思えば裁判所だった資料館もそのように変わっていく。

私はといえばコーヒーは浅煎りの方が好きになった。

元SIAFラウンジスタッフ 小林大賀

植物図鑑 05



【オリヅルラン】  
白と緑の葉っぱが美しいオリヅルラン。可愛らしい白い花を咲かせるこの子ですが、少し寒くても日当たりが悪くてもすくすく育つタフさが魅力の一つです。花が咲いた後には小さな子株をつけて、仲間を増やそうと頑張っている姿も。この子株が折鶴に似ていることからオリヅルランと呼ばれているそうですよ。ご来室の際には子株にも注目して見てみてくださいね。